

ウィリアム・アーヴィン著

ウォルター・バジ ョット (13)

訳 渡 辺 弘
立 川 順 子

第13章 数篇の大作

アメリカ憲法を研究する際に、バジ ョットはイギリス憲法について多くを学んだように思われる。恐らく、前者における権力の分立という不利益は、奇妙な力をもって後者における権力の統一の存在と価値を彼に確信させたのであろう。「アメリカの危機」(“The American Crisis”)という評論には、二つの政府に関する啓発的な比較が含まれており、『イギリス憲政論』ではこの比較が詳細、入念に論じられている。彼が何年間も自国の政体について書くつもりであったことは明白である。何故なら、彼の著作は細心の準備の痕跡を全て示しているからである。事実、彼の青年期と読書の全体は一つの準備期間であった。イギリス政体の独特の現代的発展が遂げられた当時の数世紀の歴史、文学、伝記、個人の書簡及び公的な文書類について、彼がいかに幅広く読書していたに相違ないかを知るには、彼の評論のタイトルを一瞥しさえすればよいのである。疑いもなく、彼は前の時代の政治理論家達から多くの示唆を得ていた。ド・ロルム (De Lolme) の『英国の憲法』(*Constitution of England*)の中に、イギリスの憲政を機能する部分と威厳ある部分に分けるという彼独自の考え方の萌芽を発見した¹⁾。ジョン・スチュアート・ミルの『代議政治論』では、一般原理として述べられているが、奇妙にもイギリスの制度に適応しようと判明したいくつかの概念、特に政府は教化する機能を果たすべきであり、「選挙人は

単に選挙人として選ばれているのではなく、更送するための他の重要な機能をいくつかもち、そのことは彼らが単にある特殊な投票をするための代表として選ばれることを排除している時には」²⁾間接選挙が優れているという考えを発見した。エドモンド・パークの演説から、彼は政治についての基本的思想を吸収したが、それらは彼の著作を憲政の歴史のつかの間の段階の単なる一写真ではなく、永続的な重要性をもった哲学的作品にするのに大いに貢献したのであった。彼の扱う題材の最大の部分は、言うまでもなく、個人的観察と彼の眼前の直接的事実の研究——すなわち、イギリス政治の時々刻々の具体的表現である、政治的・公的生活の大いなるスペクタクルに由来していた。

バジョットの著作の出版以前には、正統的な理論はイギリス政体が君主制、貴族制、民主主義の恩恵豊かな混合から成っており、各部はその他の部分の行き過ぎと欠陥を抑制しているというものであった。バジョットはこの見解を厳然と否定し、論駁した最初の人間であった。イギリス政体を明確に理解するためには、次のようなことを認識しなければならないと彼は主張した——

それは時折、必要なときには、これまで実験されたどの政治手段よりも、より単純、簡単に、うまく機能『しうる』単純で有効な部分を含んでいる。さらに、同様に歴史的で複雑、威厳ある劇場的部分をも含んでいる。そしてイギリス政体はこれらの部分を長い過去から受け継いできたのである。それは大衆の心を引きつけ、気づかないほどであるが、全能的な影響力によって、その臣民の連合を導いているのである。

しかも、特にそのより謙虚で無知な臣民のである³⁾。劇場的部分は、言うまでもなく君主制と上院である。そのようなものとしての君主政治は二つの理由で強力な政治である。まず第1に、それは理解しやすい政治である。何故なら、行政と儀式においていかに複雑であっても、それは本質的には単純だからである。「一人の意志による行動、一人の知性による命令は、容易な着想である」が、「政体の性質、集団の行動、党の活動」は複雑で困難な事実である³⁾。実際、少数の貴族主義者達であったアテネ市民にとっては、民主主義は理解しやすいものであったかもしれないが、人口の大多数を構成していた彼らの奴隷達

にとっては、到底そのようなものではありえなかったであろう。偉大なる現代の国家は両方の階級にとって適切で理解しやすい政治を提供しなければならない。それゆえに、君主制の明快さと詩的精神を民主主義のより不透明な恩典の上位に置いているイギリスの政体は、理想的な結合を提供しているのである。さらに、君主制は大衆の眼にはある独特の神聖さをおびている。下院や首相を神聖であるとみるものはいないが、国王はその地位を人為的選択にではなくて、古来からの権利に負っているのであるから、不思議な神々しさに包まれているように思われる。そして奇妙なことに、英国王は現実的な力を失ってしまっているので、無学な者と教育のある者の双方の想像力に与える影響の点で途方もなく強大さを増してきて、彼の人格に付着している聖性は、彼の政府の種々の法律と制度にも賦与されるようになった。別の点でも、イギリスの君主は貴重である。彼はイギリス社会の長である。彼は徳性を象徴している。彼は人目を欺くもの、すなわち目隠しであって、その背後で国家の現実の支配者達が興奮しやすい国民を驚かすことなく交代しうるのである。彼、君主はいくつかの実践的な機能を所有していた。すなわち、彼に仕える大臣の助言に基づいて、彼は議會を解散し、新たに上院に議席をもつ貴族達 (peers) を創り出す。彼は後継の首相を任命し、少なくともバジョットの時代には、議會においてどの政党もはっきりとした大多数を占めることが出来なかったときには、何らかの実践的な選択権を行使することが可能であった。彼は外交政策にかなりの影響力を及ぼし、政府の全ての職務において「相談を受ける権利、奨励し、警告する権利」³⁾を所有していた。

上院はその威厳ある立場の点でも、大変重要であった。「高貴さは精神の象徴である」。それは最も粗野な人間の心にも「従順の感情を呼びさます…それは富の支配——すなわち金貨に対する信仰を防止しているのである」⁴⁾。そして富に対する場合と同様に、たとえ階級重視が単なる偶像崇拜にすぎなくても、少なくとも「幾多の偶像崇拜の競い合いの中で真の崇拜が勝ち目を得るものである」。しかしながら、「富をあがめる際に、われわれは人間ではなく、人間に対する付加物をあがめているのである。継承された高貴さを崇敬するとき、わ

れわれは偉大な能力、すなわち、自己の中にあるものを表現する能力を所有していそうであるという事実を崇敬しているのである」⁴⁾。実際の組織として、上院は下院の立法を修正し、保留することが出来るだけであった。もし上院があえて断固とした世論を無視するとしたら、投票を逆転させるために首相は国王に十分な数の貴族 (peers) を創るように進言するかもしれない。上院のもつ利点はいくつかあった。富裕であったので、時には下院に対して行われた災禍を招くような力からは免れていた。大衆の引き立てとは無関係にその権力を享受していたので、下院をして重要な諸問題をじっくりと検討するのを阻害している煩雑な日常の業務を免れていた。上院の欠陥は恐らく利点以上であったであろう。殆ど全て大地主達から構成されており、その地位を競争よりもむしろ生得権によって獲得し、勤勉よりも怠惰の習慣の中で育っていたために、上院は党派性が強く、凡庸で不活発になりがちであった。これらの弱点は上院にかなりの数の一代貴族 (“life peers”) すなわち、一代限りで議席を保つ名士を導入することである程度矯正されるかもしれないとバジョットは提案した。

下院は5つの主要な機能を所有していた—すなわち、選挙、表明、啓蒙、報道、立法の機能である。これら全てを下院は概してかなりうまく果たしてきた。その最も優れた点は言うまでもなく、行政部と立法部の結合であった。下院自体が首相を選んでいて、事実、党の組織上、常に潜在的選択となる傾向があった。党内のかなりの大多数に支持されている首相は、道理上、ある程度の在職期間の持続が保証されていたが、彼には行き過ぎは禁物であった。自己の党に関する極端な思想を過度に主張することは出来なかった。さもないと、英国議会で大多数を占めている穏健な人間の大半が、彼の提議に投票で否決するであろうからであった。しかし、議会自体はあまりに気まぐれであったり、秩序を乱すようになることはご法度であった。さもないと、首相が解散を威嚇的にはめかし、全ての議員に選挙での改選を要求することが出来たからである。イギリスの制度の下では、その危機はアメリカの場合のように選挙の規則的な間隔を置いてではなく、或る重大な公的問題に関しての反対の投票の後にやって来た。白熱した討論がなされ、全閣僚、そしてしばしば議会の運命はそ

れいにかんにかかっていた。それゆえに、大衆はその討論に注目し、従って議会は其の啓蒙する機能を果たしていた。バジョットの時代には、下院はアメリカの選挙委員団 (electoral college) のように、誓約を行った国民の単なる代弁者にはなっていなかった。下院はきわめて重要であった。立法部の全ての重要な問題に責任をもって決断を下し、従って誰が主要な行政官になるべきかに責任ある決断を下した。首相は実際に国民の中の選ばれた者達によって選ばれた。下院はその表明する機能をたいそう巧みに果たした。労働者階級には代議士選出権を全く与えなかったという点は例外として。バジョットの考えでは、その階級は大半の有権者の一人か二人を支配すべきであった。もし彼らがそうしていたなら、下院はその報道する機能をさらにうまく果たしていたであろう。個々の不平をより巧みに表現し、各自の不満を公にさらしていたであろう。下院は公式化するのは下手であったが、優れた法律を可決した。要訳すれば、巧みに法律を制定したが、それは見事に統率され、選ばれていたからであった。英国は『謙譲な』(“deferential”) 国であった。多くの人々は選ばれた少数の者に伝統的に敬意を抱いていたが、それは彼らが教育と才能の価値を認めていたからではなく、教育と才能という権威が、時間という試金石に試され、伝統的名声を獲得し、敬意を起こさせる、演劇的付加物に取り囲まれていたからであった。イギリス国民は、それゆえに、自分自身の階級に所属する者達によってよりも、むしろ教育と富のある人間に支配されることを好んだ。

『イギリス憲法論』は恐らく、バジョットの円熟した作品の最高の見本であろう。それは「クーデターに関する書簡」のもつ熱情、気魄、若々しいひらめき、才気煥発な点はないが、論理の精密さ、分析の完全さ、構成の確かさ、立論の徹底性においては「書簡」をはるかに凌駕しており、事実、バジョットの著作の中ではユニークなものである。それは外側の形態と外観の背後に、主権と権力の核心を看破する彼の非凡なる才能を最高に明らかにしている。それは彼の政治的想像力という政治家らしい才能、提案された新たな法律と形式の働きを予言し、目に見えるように描く才能を明らかにしている。バジョットの選挙改革に関する論じ方をミルのそれと比較すること、或はもっと明確には、ト

マス・ヘア (Thomas Hare, 1806~91. 法律家。1859年にヘア式と呼ばれる比例代表制を提唱した：訳註) の選挙案に対するバジョットの拒否とミルのその弁護とを比較することによって、政治評論家にとってこの才能がいかなるものを意味するかがわれわれには理解出来る。人間が過去に羊のように振る舞ってきたことをいかに認めてはいても、ミルは彼らが将来、哲学者のように行動するであろうことを常に望んでいる⁵⁾。バジョットは一貫して現在あるがままの人間を見ている。全体的に見て、彼の著作は偉大な国の政府の驚くほど写実的で鮮明な像を提供している。しかしながら、それはもはや存在しない政府像である。石のように硬化した形態というその演劇的仮面の下に、イギリスの政体はいまだにゆっくりと微妙に変化し続けてきた。1881年以来、党の政治路線は大いに強化されてきた。選挙権の広範な拡大は、無所属の候補が自己の費用によって選挙で競うことを次第に困難にしていった。そして、候補者が従順になるにつれて、政党はいっそう独裁者的になった。ジョセフ・チェンバレン (Joseph Chamberlain, 1836~1914. イギリスの自由党の政治家。帝国主義政策を推進：訳註) の保護の下で厳格な規律の利点をかけて学んだので、党はその代表者達に複雑な綱領に固く忠誠を誓い、多彩で大いに名の通った党の指導者達に絶対的な服従を誓うことを要求した。その結果として、下院はアメリカの選挙委員団に幾分、似るようになった。そのメンバーは単なる集票マシン、大臣を選び、盲目的に支持するために選ばれた単なる代表にすぎなくなった。内閣の絶対権は下院の衰退とともに増大し、内閣の絶対権の増大につれて、官僚政治の傾向が強まっていった。何故なら、政府はその領域をあまりに広範に拡大し、あまりに複雑、専門的になったために、一握りの政党政治家達によって適切に支配、監督されることが不可能になったからである。恒久的な官僚政治が多大な権力を吸収した結果、今やそれは英国の民主主義自体を脅かし、暗い影でおおうようになっている。

これらの諸傾向をバジョットはほんの部分的に予見していたにすぎなかった。表面的には、彼の著書は黄金期におけるイギリス政体の古典的記述である。かつての状態と、新たな状況の不可避免の変容を伴って将来再びあるかもし

れない状態は描かれているが、現在の情勢は不問に付されている。しかし、基本的には『イギリス憲政論』はこれにとどまるものではない。それは真の『古典』であり、それにはいくつかの理由がある。まず第1に、適切な解説は行なわれていないが、その著作は20世紀のイギリス政体についての洞察力に富んだ批評を実際、含んでいる。すなわち、現代の権威者達が、自己の主題に関して見事なまでの筆の冴を見せてはいるが、もっと慎重に考察する必要があるような批評である。さらに、私がすでに示したように、バジョットの著書は全ての代議政体が果たすべき諸機能を描いている⁶⁾。最後に付け加えるなら、それには政治哲学が含まれている。この哲学は、言うまでもなくバークから大きな影響を受けているが、私がすでに述べてきたものである。しかしながら、『イギリス憲政論』の中ではいくつかの独特な卓越した面が見られ、ここで詳細に論ずる価値をもっている。宗教に関する章の中で、私は下層階級の重要性を度外視するバジョットの性向について語った。彼の政治的見解はバークのそれと違わず、大いに類似している。大衆の政治的能力に対するバークの不信はよく知られている。「世界史のいかなる時代においても、現実の権力の座を喜んで大衆の手中に委ねた立法者は一人もいなかった。何故なら、そこではいかなる支配も、規制も、確固とした指揮も全く入り込む余地がないからである」⁷⁾。さらに、「事実、気まぐれな権力は大いに俗人の低劣な趣味に応じているので…共和国を引き裂いている意見の相違の殆ど全ては、権力が行使されるべき方法に関してではなく、権力が委ねられるべき担い手に関してである」⁷⁾。バジョットの見解は同様に、現実主義的で、その言語はしばしば激烈といっているほどである。彼は選挙権の拡大を何にもまして恐れた。「議会改革論」の中で彼は次のように記している――

全ての歴史の教訓とは明白に以下のようなものである――つまり、代議制度のレベルを政治的能力のレベルの下に下げようとしても無駄であるということ、そのレベル以下では名目上の権力は容易に授けることが出来るが、現実的な権力を与えることは恐らく不可能であろうということ、せいぜいよくて、思慮分別のない本能的人間に漠然とした発言権を与える程度で、概して、墮落しやすい人間に墮落する機会を与えるにすぎないのであるということである⁸⁾。

さらに、1867年の英国選挙法改正法の数年後に『イギリス憲政論』の序文を書きながら、彼は労働者の支持を求めて二大政党がお互に競争するかもしれないという危惧を感じていた。政治家は今や重大な責任を有しているのだと彼は警告している。彼らは無知な大衆の最悪の本能ではなく、最高の本能に訴えねばならない。とりわけ恐れられているのは、下層階級が自分達自身の目的のために政治的に結合することである。そのような結合は必然的に「教育に対する無知の優位性と知識に対する数の優位性」⁸⁾を意味するであろう。事実、あらゆる形態の極端な民主主義は、バジョットの心に恥辱という最も過激な言葉を喚起させている。彼が『有権者の政府』と呼ぶもの——すなわち、議員が複雑な綱領に束縛され、有権者の単なる機械的な代弁者にすぎなくされている20世紀の制度——に対して彼は最大の軽蔑を抱いている。「有権者の政府は議会制政府の正反対である。それは活動の場に近い穏健な人々の作る政府ではなくて、活動の場から遠く離れている節度をわきまえぬ人々の政府である」⁸⁾。換言すれば、逆説的に聞こえるかもしれないが、真の『議会制』、すなわち代議政治は、その最高の状態としては常に貴族政治なのである。それは選ばれた少数者の政府であり、バジョットが英国人の気質の中で高く評価している、より高位の権力に対するあの『服従』の性質を大衆の大多数がもつようになるに従って、それら少数者はいっそう優秀となるのである。

ヴィクトリア朝時代に英国が前例のない社会問題に直面していたこと、産業革命が貧窮者達に想像も及ばない不幸と退廃を与えていたという点にわれわれはバジョットの著作を読むことから気づくことは決してないであろう。彼の著作のいくつかは、全ての矯正可能な悪弊は19世紀の中葉までには正されるという信念を示しているように思われる。彼は『イギリス憲政論』の中で、煽動家になる時期は1820年であったと言明している。1870年になると、それ以上悪い職業はなかった。「もし何かについて不平を述べたいと思う人がいるとしたら、彼は聴衆をとらえることはほぼ不可能である」⁸⁾。チャールズ・ディッケンズの後期の小説は、初期の見事な業績を大いに台なしにしてしまった。初期には彼は現実の様々な弊害に対して人々を眼ざめさせた。後期になると、その弊害が

全て徐去された後でも、大衆の心を危険に、不必要に刺激し続けた⁹⁾。さらに、大都会の種々の誘惑に屈服し、現代の産業生活の単調さに合わせて、大衆は途方もない圧迫感の下にあって、『全ての深遠なる道徳的感情』を失う危険に瀕しているのであるとバジヨットは認めている。彼の救済策は、彼らしく保守的である。彼は状況の緩和や、人々の物質面での改善をではなく、『彼らの良心の効果的修養』を提案しているが、それを成し遂げる手段については、彼はかなり漠然としたことしか言っていない⁹⁾。

しかしながら、下層階級に対して特別に同情的であるわけではなかったが、バジヨットは、特に民主主義の増大する影響力がいつそう明白になった後は、少なくとも彼らを公平に評するにやぶさかでなかった。性急で感傷的な博愛主義と、『貧者の楽園』(“poor man’s paradise”)を建設しようとする全ての試みに対しては、彼は常に最も激しい嫌悪感を感じていたが、1867年の選挙法改正法以降は、政治家は大衆に対してあらゆる可能なだけの譲歩をすることによってのみ階級闘争を回避し得るであろうと決意した——

彼らは全ての悪のみならず、全ての悪の出現を避けなければならない。彼らがいまだ権力を保持している間に、現実の不平不満全てのみならず、可能な場合には、全ての表面的な不平不満をも除去しなければならない。彼らは国の安全を損うであろうような主張を不承不承認せざるを得ないといったことにならないように、彼らが容認してよい主張は、ことごとく積極的に認めなければならない⁹⁾。

確かに、これは腹藏ない公平さとは言えないが、少なくとも公平さには違いない。

パークもバジヨットも共に、社会が本質的に平等主義的ではなく、貴族主義的であるとの信念の持ち主であることは言うまでもないことである。必然的に、言わゆる『上層一万人』(“upper ten thousand”)すなわち、富と権力、文化と洗練をもった人々が登場し、彼らは政治のみならず芸術や科学においても、国の指導者達が牽引される階級を形成しているのである。恐らく時にはこの階級の組織が損われたり、その政治的力が大いに弱まったりすることはある

うが、国家はその階級の代表者達によって支配されるのが最善であることが普通であり、どの程度の巧妙なる政治的組織も、庶民による能率的な官僚政治も、真に偉大な指導者達の不足を補うことは出来ない。パークにとって英国の『本来の貴族政治』は、主に世襲貴族と高貴な人間達によって代表されていた。しかしながら、彼らの間で、困難の末にはあるが、功績によって立身する人間達が彼らの立場に取って代わるかもしれない。地主であり、法律による特別な特権の持ち主であるので、この階級の人間は全ての特権と法律の利己的擁護者であり、生まれながらの政体の守護者である。青年期に教育と訓練というあらゆる恩典を享受し、責任と公務の雰囲気の中で育ち、少なくとも理論上は階級や家系の誉れによって育てられているので、彼らは国家の適切な指導者、支配者であると同時に、『市民的秩序に対する優雅な装飾』、『洗練された社会のコリント市民的資本家階級』である¹⁰⁾。バジットにとって貴族は明らかにさほど魅力的なものではない。もっとも彼はぎこちないやり方ではあるが、えり抜きの少数者に卓越性を与えたとして、彼らを是認はしていたが。彼は彼らのもつ『劇場的』価値にいたく心を打たれ、単なる富や権力よりも精神を象徴し、より人間的な優秀性——すなわち、「大いなる能力を恐らく所有しているであろうこと、自己の中にあるものを発揮する能力」¹¹⁾を代表するものとして新興の富豪階級よりも彼らの方を好んだ。しかし、彼にとって真の貴族社会とは、知性と才能が少なくとも顕著な特質である社会であった。それは国家、特に首都において必然的に形を成してゆく、全ての才能ある人々で構成される社会であり、彼らにとって称号と富から成る貴族社会は一種の枠組みであり、接合する要素として機能する社会であった。バジョットの概念はパークのそれよりもはるかに形式ばらず、包括的で現代的である。彼は貴族社会を一種の神聖なるサークルとみなすよりもむしろ、生存競争の中で高い地位を勝ちとったり、あやうく継承してきた個人から成る自由な社会とみなしている。貴族に幅広い重大な責任を課しているので、彼の人格と生活様式に関してバジョットが高い理想を構えているのは、きわめて当然である。この理想は言うまでもなく人道主義的であるが、それについては私はすでに宗教に関する章の中で詳細に

述べた。

その評論, 「社会進化の理論におけるダーウィニズム」 “Darwinism in the Theory of Social Evolution”) の中でギディングス (Giddings, 1855~1931. アメリカの社会学者: 訳註) は次のように言っている——

『種の起源』に関する論争が20年間に及ぶ知的嵐の中を吹き荒れていた時期の1871年に『人間の由来』(*The Descent of Man*) が出版されて初めて人類の進歩の教義に対する自然淘汰理論の充分な重要性が科学の世界で理解された。スペンサー氏 (Herbert Spencer のこと: 訳註) は『種の起源』が世に出たときにそれを悟った。ダーウィン氏自身は非情な生存競争が正義という安らかな果実をもたらすという逆説を納得出来るように解説しなければならないと知覚していた。しかしながら、神秘に対する手がかりが求められるかもしれない生存競争の特殊な局面を最初に認識していたのは、スペンサー氏でも、ダーウィン氏でもなかった。そのような発見をした才能豊かな思想家とは、『ロンドン・エコノミスト』誌の編集者である、ウォルター・バジョットであった。彼の著作『自然科学と政治学、副題自然淘汰と遺伝の原理の政治社会学への適用』(*Physics and Politics, or Thoughts on the Application of the Principles of Natural Selection and Inheritance to Political Society*) は、1867年11月に始まった『フォートナイトリー・レビュー』誌の一連の論説の最初に公表された¹²⁾。

いくつかの点で『自然科学と政治学』は『イギリス憲政論』ほど強い印象を与えない。論理は凝集力を欠き、分析は入念で断固とした調子であるとは言い難く、又その構成は確固として論理的必然性に満ちているとは言えない。しかし、その書は確かにバジョットの最も興味深い作品の一つであり、彼の幅の広さと適応性の好例である。事実、その主題は測り知れないほどに、殆ど絶望的なほど拡散し、未知の分野では集中的な読書の準備を必要としたに違いない。詳細にその読書の多くの項目と、その読書から明らかに獲得された多くの暗示をたどることは極度に困難な作業となるであろうから、私は試みることはしないでおこう。その主要なる思想の自然淘汰論に対しては、バジョットは勿論、ダーウィンに負っている。彼はまたかなり詳細にトマス・ハクスリー (Thomas Huxley, 1825~95. イギリスの生物学者でダーウィンの進化論を支持、普及に努めた:

訳註) やハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820~1903. イギリスの哲学者・社会学者。独学で進化論の概念をダーウィンに先がけてその思想の中心にすえ、これを広く自然及び人間の諸分野に適用した：訳註) その他のそれほど注目されていない科学者達からかなり詳細に引用している¹³⁾。原始社会についての彼の知識は主にサー・ジョン・ラボック (John Lubbock, 1834~1913. イギリスの銀行家・政治家・学者。ダーウィンの影響を受け、人類学・考古学・動植物学などの広い分野での研究を行った：訳註) やサー・エドワード・バーネット・タイラー (Edward Barnett Tylor, 1832~1917. イギリスの人類学者で宗教思考の起源をアニミズムの霊的なものへの信仰に求め、宗教の進化を説いた：訳註) という著名な人類学者の著作や、古代法制史の偉大なる権威、サー・ヘンリー・メーン (Henry Maine, 1822~88. イギリスの法制史家。進化論的な立場からアリア諸民族の古代法を研究、法学研究に歴史的・比較的方法を創始した：訳註) の著作に由来していた。実際、サー・ヘンリー・メーンは古代法の宗教的制裁の概念を含めて、バジョットの数多くの基本的概念に大いに寄与した¹⁴⁾。社会進化における秩序と進歩という彼の原理を公式化する際に、バジョットは恐らくコールリッジの『教会と国家』 (Church and State) とミルの『代議政治論』における似たような議論からいくつかの暗示を得たのであろう¹⁵⁾。ミルの著作を読んで彼は大いに益するところがあったように思われる——特に停滞した文明、古代の奴隷制度の利点、政治と社会発展の関連性についての見解はそうである¹⁶⁾。

バジョットの目的は、私が述べたとおり、社会の進化を説明することである。彼はまず最初に混乱と無秩序の時期である『孤立の時代』 (“age of isolation”) を仮定する。そしてそこで政治組織が成長し始めた——どのような種類のものであるかは殆ど問題でない——政治組織は必要なものであったからである¹⁶⁾。同一家族の成員の中で、次には同じ血をもった人々の中で共同体意識が発展していった。「強烈な意志をもった個人達が小グループの人間達を掌握し、彼らが愛着を感じて遵守する様式を彼らの代わりに作った¹⁶⁾。一種の『偶然の支配』 (“chance predominance”) がグループの全てのメンバーが否応なく模倣させられる行動の型を創り出し、このようにして国民性が存在するようになっ

た¹⁷⁾。次第に、バジヨットが『慣習の推積』(“cake of custom”)と呼ぶものが形成されていった¹⁷⁾。伝統、習慣、タブーの入念な枠組みが生じ、宗教的制裁の力と超自然的罰則という刑罰によって、野蛮な性質の激しい気まぐれに厳しい抑制を課した。規律ある社会は規律なき社会を征服し、その様式を彼らに押しつけた。何故なら、征服された者達は自然に勝利をおさめた者達を真似る傾向があるからである。「文明が発祥する、その理由は文明の始まりは軍事的便宜だからである」¹⁷⁾。いくつかのささいな点で例外はあるものの、文明が巨大化すればするほど軍事的便宜も増大するために、文明は継続する。そこでは闘争による淘汰が行なわれる。法律、道德、宗教、芸術、科学は、それらがより優れた武器の開発に役立つために、発達する傾向がある。孤立の準備期間に国家建設の時代が続く。そこでは様々な社会の結合のプロセスが明らかに強められ、より大きな規模で作用する。「バジヨットが人種創造のプロセス(大部分は有史以前に限定されているが)と現代的な現象である国家建設のプロセスとを区別しているのは賢明である」¹⁸⁾とブリストル教授(Bristol)は書いている。最初のプロセスに関しては、彼は用心深く多くを語っていない。第2のものは二つの力、すなわち、模倣と迫害の力の作用の結果生じるのであると彼は主張している。文明化された人間の中でさえ、模倣する傾向は強くみられる。殆どわれ知らずと言っていいほどに、われわれは著名な人間の真似をし、新しい様式や癖を模倣し、他人が信じているものを信ずる傾向がある。未開人においては、視覚や聴覚と同様にこの感覚は何倍も生き生きとし鋭敏である。さらに、全ての原始人は強い集団の責任を感じるために、社会規範の拒否(nonconformity)を激しく弾圧する。種族の神聖な方針に違反することは全て、違反した者のみならず、共同体全体に罪をもたらすと彼らは信じているのである。これらの力の効力は、いくつかの種類の社会淘汰によってさらに強化された。

文明の初期の段階においては、幼児の死亡率が高く、このことはそれ自体、一種の淘汰である——良きスパルタ人となるに最もふさわしい子供は、スパルタ人の幼児期を生き延びる確率がきわめて高い……同じように一種の親の側の選択が働いて、

同じような人間を生かし続ける傾向が恐らくあるのではとも私は想像している。自分の両親を最も喜ばせる子供達は両親から最も優しく扱われ、生き延びるチャンスが最も多くあり、概して彼らのお気に入りには最も『有望な』子供達、すなわち、種族の主要な様式と現在の種族の趣味に従って、その種族にとって一つの誉れとなるように思われる子供達であろう¹⁹⁾。

しかしながら、いったん慣習の堆積が形成されると、それを再び壊すことは困難である。絶えざる進歩は絶えざる変化の可能性を前提とする。もし慣習の堆積が決して壊されることがなく、新たな変化が出現するとたちまち抑圧されるほどに旧体制の暴虐が甚しくなるとすれば、それ以上の進歩は不可能である。中国やインドのようないくつかの文明は、言わば慣習によって硬化する前に、比較的高いレベルに到達していた。事実、それがさらに進んだ段階での進歩は例外であり、何らかの変化と革新が可能な社会にのみありうることである。要するに、『自由な国家』(“free state”)にとってのみ可能であり、それは「主権が多くの人間に分割され、そのような人間の間にさえも討論が存在する…国家を意味している」¹⁹⁾。評議会や集会は原始人達の間で稀なものではないが、普通は実際の事業にのみかかわっている。もし討論が根本的に国家に影響を与えたとしたら、それは根本的で、基本的問題と原理についての討論であらねばならない。そしてそのような討論は感情に火をつけ、理性に目隠しをし、暴力に向かうよう刺激する。内乱によって常に引き裂かれている国家は、進歩が不可能と言ってよい。進歩的国家とは、必然的にあまり興奮することなく、刺激に富んだ問題を論ずることの出来る国家である。アテネとローマでは、貴族党と人民党が長期間の憲法上の討論を指揮し、それが結果的に大なる革新と発展を導いた。このプロセスは貿易と植民地下の広範な影響力によって進められた。

「文明化した時代は野蛮な時代に勝ち誇っていた人間性を継承し、その性質は多くの点で文明化した状況に全く適合していない」¹⁹⁾。原始的生活においては、様々な問題が平明・単純であり、激しく絶え間ない行動によって最も巧み

に手早く処理される。この理由のために、「静かにじっとしていられないこと、直ちに行動したいといういらいらした願望は、人類の最も顕著な欠陥の一つである」¹⁹⁾。われわれは行動を愛するあまり、計画する時間を決してもてない。哲学者達ですらも思考することに性急でありすぎて、判断する時間を全くもてず、ささいな暗示にとどめた方が賢明であるものを途方もない体系へと拡大してしまうことがしばしばおこる。多くの商人が1日に4時間注意深く商いをするよう勧められるとしたら、彼らは金持ちになるであろうが、彼らは焦って8時間商いをし、自滅してしまうのである。討論の習慣は性急な行動を抑止する。それはじっくりとした考慮を保証し、人間を冷静・思慮深くし、彼らを寛容にし、古代の習慣の野蛮な偏見から解放してくれる。とりわけ、それはバジョットがイギリス人の特性で非常に称賛すべきと考える、あの『活力ある中庸』という性質を伸ばすのである²⁰⁾。

その書の結論で、著者はこれまでに何らかの現実的進歩があったのかどうか問うている。この問題、特にその芸術的、道徳的、宗教的面においては、意見の相違が最も存在するということを認めている。その言葉自体が白熱した論議的なのである。それにもかかわらず、ほぼ万人が認めるであろうような、はっきりと立証しうる何らかの進歩があったと彼は感じている。人間は戦の方法を改良し、その幸福の手段を倍加し、自然の威力に対する支配力を増大させてきた。このような有利さは単に外的な面ばかりではない。それらはある種の性格類型にも依存しているのである。それらは恐らく、スペンサーの用語で言うところの、環境への適応性の強化と要訳されるのが最も適切であろう²¹⁾。

進歩は常例というよりも例外であったと指摘しつつ、バジョットは進歩をひき起こしたものが何であるのか問うている。まず最初に、自然はどこであろうとも才能、特に高度な才能に報いを与える。事実、有利な社会条件はそのような報いを大いに増やすことが出来る。実際、人類は集団においてのみ進歩が可能であって、その構成員達は容易に協同することが出来るためには、充分似通っていなければならない。競い合う集団の内部では、社会淘汰が最良の制度、最良の性格類型、最良の宗教を保存してゆく。すなわち、『防備を固め』、『こ

の世界において自信』を受けるものを保存してゆくのである²²⁾。

現代の社会学の権威者達の間では、『自然科学と政治学』の価値に関してかなりの意見の幅がある。F. N. ハウス氏 (House) はバジョットは単に派手な言葉の作り手であることを示したにすぎず、彼の著作の中の殆ど全ての思想はすでに「先人達、特にサー・ヘンリー・メーンの著作の中に内在している」²³⁾と言明している。しかしながら、大部分の著者達は「彼は今日われわれが科学的社会学の理論的核に属していると認める結論に到達した」²⁴⁾という F. H. ギディングスの見解に賛成している。確かに、競い合っている社会集団の間の模倣、迫害、討論、自然淘汰の社会的意味は、『自然科学と政治学』において説明されているほどに明白に認識されたり、鮮やかに描かれたことはこれまでなかった。そしてその著書はまた、奇妙なことにダーウィン自身を含めて、このような概念を表明してきた人々に強い影響力をもち続けてきたことも確かである。リシュタンベルジェル教授 (Lichtenberger) は『人間の由来』に与えたバジョットの思想の影響を明確に洞察している²⁵⁾。だが、『自然科学と政治学』は単なる陸標ではない。それは二つのきわめて明瞭な永続的要素をもつ古典でもある。それは単なる抽象的理論を扱っているのではなくて、中味のある人間性を扱っている。私の判断しうる限りでは、ハリー・E. バーンズ (Harry E. Barnes) の次のような意見は正しい——「バジョットの『自然科学と政治学』は依然として価値を保ち続けている。というのは、彼は時間が何らかの物理的方法で変化させることがありえない、集団行動の根本的・心理学的基盤を取り扱ったからである」²⁶⁾。さらに、その作品には文学的価値がある。同じ思想をもっと現代的な形式で表現している他の著作は存在するであろうが、より生き生きとした形式で表現しうるのは殆ど存在しない。それは単に知識を授けるだけでなく、楽しみながら知識を授けてくれるのである。

この作品の中でバジョットが愚鈍さの価値についての理論に関して決定的な評言を述べていることも付言しておくべきであろう。古代の不安定な社会においては、思想は、人間が規律と抑制を必要とする時期に変化と興奮を導入するものであるから危険である。しかし、人間が穏健・賢明になるにつれて、思想

は価値あるものとなり、国家の着実な進歩は全て、思想を冷静に論じ、評価する能力の発達にかかっている。討論の教義は愚鈍さの教義に対する適切な解答である。恐らく、前者は後者の教義の完成でさえあるのだろう。何故なら、バジョットは誤った思想に関する興奮した、突飛な討論を依然として非難しているからである。彼は健全な思想を冷静に討論することがいかに貴重このうえないかをも認識している。この作品で彼はまた、人間の進歩における一つの力としての科学に大いに賛辞を呈している。

サー・ロバート・ジフエンはバジョットの経済関係の著作についてすでに充分に書いており、私は適任とは言い難いので、それらについては比較的簡単に述べることにし、事実、私は彼の思想の技術的面よりも人間的側面により関心があるのである²⁷⁾。或る意味では、経済に関する著作は大変人間的である。「何故バジョットはこれほど多方面で成功したのか」と J. M. ケインズ氏は問うている。「その質問に対しては答がすぐ返ってくる。バジョットは心理学者であった——つまり心理分析家であったのだ」²⁸⁾。彼は理論的な経済学者というよりも、むしろ金融に関する心理学者であった。抽象的理論の点では、彼は幾分、欠陥があった。彼の長所は実業と政治の実際の・個人的側面を分析し、予言して描くことにあった。彼は経済について政治家のように、また殆ど小説家のように書き、ちょうど小説家が最も劇的な状況における、その描く登場人物達の思想と行動を想像するための確かで鋭敏な感覚と想像力をもっているように、バジョットは最も複雑な政治的・商業的状況における政治家と実業家の思想と行動を予言する確かな感覚と想像力の持ち主であった。

彼の最初の偉大なる経済に関する著作である『ロンバード街』(1873)は、このような目に見えるように描き、予言する能力の典型的な産物である。それは単にロンドンの金融市場の分析であるだけでなく、その様々な傾向の予測、その弱点の批判、その治療法の勧めでもある。それは情報を与えることにとどまらず、世論を喚起し、行動を産み出すよう意図されていた。その書はイギリスと当時においてはヨーロッパ大陸の信用貸の全構造が究極的にはイングランド銀行の正貨準備に依存していたと指摘している。従って、イングランド銀行

には測り知れないほどの圧迫がかかり、もし正貨準備が『憂慮すべき最低線』にまで下がると、広範囲に及ぶ恐慌というゆゆしき危険が生ずる。ケインズ氏が主張するように理論的な皮相性はあるものの、『ロンバード街』は初めて恐慌と景気循環の本質を解説し、イングランド銀行がそれらに対処すべき手順を提案している。それはイングランド銀行に対しては一つの政策を主張し、政府とイギリスの信用貸制度全体に対してはきわめて賢明で保守的ないくつかの改革案を推奨している。個人経営の銀行の衰退と株式銀行の増加を予言している。『ロンバード街』は、ケインズ氏が述べているように、「シティーの大立者に照準を当て、将来の政策への手引き、二、三の基本的真理のために彼らを徹底的にこきおろすよう意図されていた」²⁸⁾。その言葉はその目的にふさわしいものである。そこにはシティーの用語と表現があふれ、文体は単に飾らない明快なものであるだけでなく、平易で実利的である。そこには繰り返しが多く、複雑さは殆どみられない。しろうとでさえ、容易にその議論についてゆくことが出来る。『ロンバード街』は驚嘆すべきほどにその目的を達成した。バジョットが擁護したことの多くは実行に移された。彼が予言したことの多くが実現したように。しかしながら、それが引き起こした諸状況の変化そのものが、その書を幾分、時代遅れのものにしてしまった。だが、その書は依然として読まれ、カレッジや大学でテキストとしてかなり広く使用されている。本質的には、『ロンバード街』は選挙区を代表することが一度もなかった政治家によって成し遂げられた一大改革の興味深い記録である。

もう一の別の点で、バジョットは『ロンバード街』において重要な功績を残した。サー・ロバート・ジフェンの言葉を引用してみよう——

現在の英国における場合と同様な大部分の実業界における経済現象の作用を…描写する際に、彼は実際、統計学的にのみ解決可能な諸問題の解決にとって、準備的作業をしていたのであった。イングランド銀行の正貨準備と或る時期、或る年のイングランド銀行券の流通の増加、ビジネスにおける好況の年と不況の年の連続、季節によって、年によって価値の変動する貨幣の傾向、或る時代に特殊な恐慌の危険、これらのことに関連した全てのことは、統計学的な考察を含んでいる。そして

嚴密には統計学者ではないが、その量に関する判断力によって、バジヨットはいかに統計を読むとるかを教え、より精密な研究の方法を準備したのであった²⁹⁾。

『経済に関する研究』は、恐らく政治経済学に関するバジヨットの著作のうちで最もよく知られたものであろう。それらは三巻の作品を形成するよう意図されていたが、1877年のバジヨットの死のときに、すでに書かれていたのは200ページに満たなかった。サー・ロバート・ジフェンが述べているように、これらの研究は明らかに『自然科学と政治学』で着手された研究の成果であった²⁹⁾。その書の最初のページにわれわれは次のようなことを読んで知る——

われわれが見ざるを得ないような発明品——例えば、鉄道や電信機をもつ新世界が、われわれの周りで成長してきた。われわれには見えないけれども、新しい思想の世界が存在し、われわれに影響を与えている。これらの影響の完全なる評価には、一冊の偉大な書物が必要であろう。私にはそのようなものは書けないことは確かだ。だが、一、二の重大な点についていかに新しい思想が二つの古い科学——すなわち政治と政治経済学を修正しつつあるかを私は二、三の論文で有益に示すことが出来る³⁰⁾。

しかし、一冊の書物という制限内で、この計画を実行するというバジヨットの計画を重病が変更を余儀なくさせた。『自然科学と政治学』は政治学のみへの『新しい思想』の影響を示している。数年後に書かれた『経済に関する研究』は政治経済学への影響を明らかにしている。見事なほどに文明化された著者が未開の生活の中にこれほど多くの教訓を見出しているのは、『自然科学と政治学』の場合と同様に、この書の興味深い特徴である。本質的には、『経済に関する研究』は第1に経済思想の論理的基盤と歴史、第2に実世界における現実の経済発展の諸段階への研究から構成されている。バジヨットより前の理論家達は、経済学が正確・具体的に全ての時代の全ての人間に適応しようと仮定しているように思われる。バジヨットは経済学とはまず第1に、全ての科学または全ての理論と同様に、本質的に抽象的なものであると指摘している。それは

ある特殊な原因をとり出して、それらが人間社会へ与えた結果の由来を解明している。それは人間をその性質の全体の中でみるのではなくて、経済的な動物としてみている。その法則が絶対的に真実であるのは、経済の諸原因のみが存在する概念の世界においてである。現実の世界に関しては、それらの法則はただ相対的・部分的に真実であるにすぎない。さらに、それらは契約が自由で、労働者と資本家が容易に移譲しうるイギリスのような現代の巨大な経済社会にもっぱらあてはまるのだと言ってよい。今日では人間と貨幣は殆ど全く妨害もなく、賃金と利潤が最高の点まで移動する。しかし、原始社会においては資本は殆ど存在せず、たとえあったとしても貸付けられることは決してない。全ての人間があらゆる技術を磨く。分業は全く存在しないために、労働の移動はない。そして労働の分業が生ずると、固定し、硬直化した構造となり、それによって労働者はあらゆる種類の合法的・慣習的絆によって、彼の出生地と最初の職業に縛られる。古代社会は安定していなければならないので、国家は移動を禁ずる。このような調査の観点から、バジョットは整然と政治経済学の創始者達のうちの数名を考察し、彼らを人間として、思想家として描き、彼らの根本的誤ちのいくつかを指摘し、より納得のいく理論に向けていくつかの提案をしている。彼は生産コストの精密な分析とともに結論を出し、その分析の過程で同時代のミルとケアンズ (Cairnes, 1823~75. イギリスの経済学者。古典派末期の代表者：訳註) の見解を攻撃している。人物の生き生きとした個性を書物から締出すことはバジョットにとって不可能であったように思われる。言わゆる『陰気な学問』(“the dismal science” Carlyle が経済学を呼んだ言葉：訳註) に関する書物からでさえそうである。『経済に関する研究』はアダム・スミス、マルサス (Malthus, 1766~1834. イギリスの経済学者。1798年『人口の原理』において食糧は算術級数的にしか増加しないのに、人口は幾何級数的に増加するから、過剰人口による社会的貧困と悪徳は必然的に発生すると主張した：訳註)、リカード (Ricardo, 1772~1823. イギリスの経済学者。スミスの労働価値説を徹底し、商品価値は労働量によって決定され、生産物の価値から賃金を引いた残りが利潤であるとした：訳註) についての適確で興味深い寸評を含んでおり、最終的にはもっと入念な人物描写をその

他いくつか含む予定であった。バジョット自ら『国富論』に関して述べているように、『人生から取れたての金言』(“just maxims fresh from the life”)に満ちてもいる³⁰⁾。実際、難解な理論がこれほど具体的に、これほど生き生きと考察され、表現されたことはこれまでなかった。この作品を通して、バジョットはその学問の抽象的諸問題をはっきりと想像力の前に提示し、商業の様々な現実についての自己の鋭い心理学的洞察と幅広い知識によって、従来受け入れられていたいくつかの見解を検証し、修正しようと努めた。その結果、活力に富み、興味をそそると同時に新鮮で影響力のある著書となっている。

バジョットの大部の著作は、彼が持続性のある論理と込み入った緻密な分析の両方の能力を明らかに所有していることを示している。しかしながら、それらは彼が様々な抽象的理論に特に通曉していることを明らかにしているのではない。サー・ロバート・ジフェンでさえも、バジョットの作品は経済学よりも抽象的面に関しては第二級の優秀性しかもたないと認めている。私としては彼はそのような思考が出来ないというよりもむしろ、それに我慢ならなかったのだと考えたい気がする。というのは、私がすでに説明したように、バジョットは『絵画的秩序をもった思想家』(“thinker of the picturesque order”)だったからである。彼は鮮明な想像力の与える興奮を切望し、主題のうちでそのような想像力が不可能な面からは退却した。いずれにしても、困難な主題について大部の著作を書き記した著者が、依然として真理の人間的・劇的側面に深くひきつけられていたことは注目すべきことである。われわれはそのような人間が政治と金融という難解な主題について、いかにしてこれほど多くのものを書き著わすようになったのか推測したい気になるものであるが、理由がどのようなものであれ、この機械化された世界が結局はその中心においては相変らずきわめて人間的であるということ、国の偉大さとは、その石炭や鉄の埋蔵量という量よりも、その国民性という質に依存しているのであるということに注目するように、これほど明快に教えられたことに対してわれわれは感謝すべきである。

第14章 結 論

想像力が人間を支配し、経験は彼の語ったことを確かなものにする、パスカルは述べた¹⁾。想像力の一部はわれわれのコントロールの範囲内に、一部は範囲外にある神秘的な恐るべき力である。それは外界の事物がわれわれの精神に達し、われわれの思想を形成してゆく通り道である。それは感覚による印象を蓄え、巧みに結合し、それらを頭脳の内部にある新しい世界——感傷的な夢であることがしばしばである——へと再創造する。それは過去の倉庫であり、未来の工場である。それは時にはわれわれの意志に従い、時にはそれに逆って、現在、過去、未来の像、可能なことと不可能なこと、好ましいものと好ましくないものの像を提供する。それは写實的にであれ、幻想的にであれ、われわれの周辺の世界と人生について考える際の媒体であり、その内面のイメージに従ってわれわれは考え、行動しているのである。通常、われわれを夢想させるものが最も大きな影響力を与え、最終的にわれわれに行動させるのである。人は自己の未来像、或は成功や富の未来像をもち、それらを実現しようと試みる。或はまた何か重大な事実か幻想が彼の想像力の上で燃えつきて、彼の人生を支配するかもしれない。有名な改革家達の著作は、概して、それらがしばしば入念な論理的行動計画に影響されたというよりも、むしろ彼らが究極的に期待する世界像という輝かしい未来像に影響されたのであるということを暗示している。歴史と文学の記録が示しているのは、何故戦うのか理性的に理解していた兵士は殆どいなかったが、無数の兵士達はナポレオンのような偉大な英雄像のために、または愛国心と祖国という彼らの観念の周辺に群がっている直観力やイメージのために戦い、命を落としていったということである。

全ての人間の人生は最終的には想像力の問題である。結局のところ、人はめいめいその世界についての夢を抱いて一人で生きなければならないし、もし幸福になりたいのなら、その『夢』を出来る限り実現し、妥当なものにしなければならない。明らかに、彼の成功は目に見え、触知しうる世界に関して彼が形成している様々なイメージに単に依存しているのではなく、彼が究極的な道

徳及び宗教に関する諸現実を把握する際の概念にも依存しているのである。そしてこれらの現実感覚的現象からは遠く隔っているために、幻想というヴェールを通してのみ彼はそれらを視覚化することを願うことが出来るのである。彼の幻想と想像力の性質は、それゆえに、作者の現実の力と思想の最高の指標であらねばならない。

人生の問題のどれだけ多くが想像力の問題であるかをバジョット自身充分に認識しているわけではないということは認めなければならない。彼はその能力に充分な役割を授けてはいない。彼は想像力を科学的知識の達成における主要な一部に割当てている²⁾。彼はどちらかといえば漠然と、詩にとってのその重要性を認めている²⁾。いくつかの政治思想が大衆に強い印象を与えうる媒体として、それを測り知れないほど貴重であると考えている²⁾。しかし、想像力がそれ以上の機能をもっていること、既知の真理に新たな活力を与えるかもしれないということ、或は宗教の場合のように、人間の知性にとっては容易に理解しがたい真理を解釈し、生気を与えるかもしれないということを彼は明らかに認めていない。実際の行動の領域においては、彼は大衆に対してその効果をかなり限定したものであった。貧しい者や無知な者達は必然的に空想が産み出す常軌を逸した考えや迷信に服従するが、知識人や教育のある者はものごとをあるがままに見、理性に従って行動するであろうと彼は信じているように思われる。要するに、バジョットは想像力の利点よりもその危険性の方をいっそう鋭く意識しているようである。「人間はその想像力に支配されているとよく言われるが、人間はその想像力の弱点に支配されているのであると言った方がより真実に近いであろう」²⁾と彼は述べている。

一、二の例のみにおいて、彼はいっそう深遠な見解をとっている。『イギリス憲政論』の中で、彼はイギリスの君主が宗教的な象徴であると指摘しているが、その象徴に関して全てのブリトン人は国家と市民としての義務についてのより深く、より感動的な概念に到達していると暗に示しているように思われる。しかしながら、彼の言語はあいまいで、われわれはディズレーリに関する一節をさらに強調したい気になる。そこで私はただそれがいっそう重要である

という理由のために、もう一度ここに引用したい。

ディズレーリ氏が実際以上に深く、独創的な想像力の持ち主であったなら、彼の生涯の全ての危機において、彼が行なったように時間の圧倒的な影響力に屈服しなかったであろう。彼はこれまでに一度も政治的信念をもったことがなかった。彼は恐らくそれが何を意味するのか知らないであろう。これほど多くの政治理論を創案した人間はいなかった。現存する政治家の想像力が、政治信条の新たな基盤に対する提案で、この半分はとも豊かなものはこれまで存在しなかった…彼の初期のいくつかの小説と『コニングスビー』(Coningsby ディズレーリの著わした政治小説：訳註)を知っている者達は、インド法案第2項の最後の部分を同じような精神の紛れもない痕跡であると悟った。ディズレーリ氏の小説を歴史、社会、政治組織についてのきわめて浅薄で風変りな理論で満たしている、あの同じ不健全な想像力——それはイギリス政体に関する、言わゆる『ヴェニスの提督』(“Venetian-Doge”)理論を創り出した——『カフカズ人』(“Caucasian”)種の絶対的優勢の教義——『若きイギリス』(“Young England”)の福音…そしてその他多くのもの——正に建設的な提議によって、ディズレーリ氏が下院の称賛を勝ちとろうとした時にはいつでも、これらのものが同様に目についたのであった。言葉の悪い意味で、これほど『ロマンティック』な政治的想像力、言葉を換えれば、現実の様々な法則に殆ど染まらず、それらの法則にいつでも反抗し、その代わりに弱々しい観念性をもってくような空想力をこれほど示した政治家も皆無であった³⁾。

しかし、きわめて重要ではあるが、この一節は不幸なことに少しあいまいである。ディズレーリの想像力よりももっと深遠な想像力が、より偉大な偽りのない真理を含んだ様々な理論を思いつくであろうということをバジョットは言わんとしているのであろうか。或は真理であると同時に人を動かし、現実感覚を満たすと同時に想像力を引き出すような諸理論を考えつくのだと言わんとしているのであろうか。文脈からすると第2の意味を示しているようであり、そのことに関しては、バジョットがバークやニューマンのような人物の弟子であったことが追認してくれるように思われる。しかしながら、彼の思想の全傾向はその反対である。

バジョットが彼自身の思想の中で行おうと野望したことは、言うまでもなく、科学的な超然とした態度でもってものごとを正確にあるがままに見ること

であった。そして疑いもなく、かなりの程度彼はそれに成功した。実際、彼の思想は全く独自の色彩と活力と推進力を持ち、それらの思想を詳しく点検すると、それらがひどく現実的で、滑稽味とユーモアの感覚が深く浸透し、独特の批判的で独創的な想像力から生じているのだと結論づけなければならない。バジョットは人生を感傷的にも、牧歌的にも、幻想的にも見たのではなく、その真の本質への深い洞察と、その様々な不条理と矛盾を楽しむに知覚する態度でもって眺めたのであった。彼はまた、人間的、道德的、精神的な偉大なる真理を思いつくことが出来たが、それは優れてはいたけれども幾分、その範囲が限定されていたような性質の想像力によってであった。「人間の無知について」は賢明で才気縦横の評論ではあるが、殆ど読まれていない。それは一人の弟子をも産み出さなかった。何故であろうか？ これほど壮嚴さと畏怖の念を欠いた宗教的洞察力に人間は心を動かされることがないからである。彼らは精巧な天国に満足しなければ、また、賢く機敏な神を崇拝することも出来ない。彼らは魂にとっていかに有益であろうとも、一種の巧妙な偽善としての目に見える宇宙について考えたいとは思わない。バジョットはいくつかの点でニューマンよりも健全で、確かにより現代的な思想家ではあるが、彼の宗教に関するいくつかの著作は人々に記憶されることがずっと少ないであろうことは言うまでもないことである。人々は高遠なる主題は高遠なる想像力をもって扱われるべきだと感じているからである。

彼の政治学と政府についての論考も似たような限界を露呈している。もっとも、この場合には多くの人々がその限界を幸運なる限界と考えるかもしれないが。バークもバジョットもともに最も低次の、最も明白な意味でイギリスの政体は有益な政治的慣習の集合体にすぎないと認識していて、それらの慣習がいかなるものであるかきわめて正確に知っていた。しかしながら、両者共にイギリス政体はそれ以上のものであるということも感じていた。バークにとってそれは古来の力強い構造であり、数名のイギリスの英雄達やイギリス国民の作り出した作品であり、道德的業績という一種の巨大な目に見えない大聖堂であって、そのゴシック風の窓を通して華麗な聖なる光の中で永遠なる知恵が輝くの

であった。より高次の意味ではそれは幾世紀もの間、人々の魂の中で響き渡っている、それ自体が聖なる意味であり、強力な恩恵を受け、恐るべき義務を課す、第二の契約、または啓示であった。バジョットにとってもまた、イギリス政体は恐らく究極的には神聖なものであったのであろう。しかし、直接的にはそれは有益で精巧なるものであった。それはもう一つの賢明な政治的惑わし、すなわち一つの『組織化された偽善』(“organized hypocrisy”)であった。その表面には時代遅れの古代の遺物という印象的な衣装があり、その下にはピカピカ輝く能率的な現代の機械がある。それは無知な人々の想像力をとらえ、教育のある人々の理性を満足させる。それは愚かで、へまばかりする国民によってゆっくりと作り上げられた、全ての政府のうちで最も精巧で、最も完璧なものであった。時にユーモラスで時に真面目ないくつかの逆説にもかかわらず、バジョットの描くイメージは明らかにパークのそれよりも全く現実的である。何故なら、19世紀と今日においてはかなりの程度まで、イギリスの政体は紛れもなく、賢明な政治的惑わしであったし、現にそうだからである。恐らく、バジョットはイギリス政体の歴史の精神的重要性のいくつかを見落としていたのであろうが、現在の本質的事実は鋭くはっきりと認識していた。それゆえに、彼は多分、活気のない時代には真面目な人々によって読まれるであろうが、パークのように大変革の時代に大きな保守的動きに刺激を与えることは決してなかったであろう。

しかし、このような二人の偉大な政治哲学者達は、何故、これほど広く異った観点からはば同一の真理を考えているのであろうか。私はこの疑問にはすでに宗教に関する章の中で解答を試みた⁴⁾。パークはこの世の悲惨と邪悪さをあまりに鋭く鮮烈に見たので、天の栄光への慰めとなるような洞察力が必要であった。バジョットは恐らく決して深みをのぞき込むことをしなれば、また高峰を見上げることもしなかったために、重要な中間区域をいっそう明白に、公正に観察することが出来たのであった。パークの長所は洞察の広さと気高さであり、バジョットのそれは洞察の明快さと独創性である。

バジョットが享受し、産み出したものは、賢明で警句的な真理であった。本

物の真理は退屈でうんざりさせるものであるということを絶えず主張しながら、彼は常にその真理を生き生きと刺激に富んだものにした。彼は確かな美德を冷笑的な名で呼び、愚かな混乱状態の中に賢明なる会議を見出し、健全で避けられない常識を幻想的で異国的な衣装でおおうことを愛好した。彼の思想の実体は健全さそのものであり、その用語は賢こさ、ウィット、ユーモア、皮肉である。事実、彼は若い頃は慎重な人間の趣味に一致すると同時に、彼らにとって驚くべき人物であった。しかしながら、後年、彼は彼らの意見に賛成するばかりでなく、彼らを納得させようと努めた。彼は独創性を愛する気持を抑制し、その言語を控え目にした。その結果は、驚嘆すべき平明さと、幻想を抱かずにものごとの赤裸々な本質を心に描く非凡なる能力と称すべきものである、彼の想像力のもう一つの顕著な特質がいっそう明白に卓越したものになったのであった。例えば、『イギリス憲政論』ではその貴重な魅力と名声の中にある王室一家を描いているが、結局のところ王室は『引ききもっている未亡人と定職のない一青年』⁶⁾から構成されているにすぎないということを常にはっきりと念頭に置いているのである。彼はものごとをそれらが火星の住人にとって見えるであろうように見ることが好きであった。ウィルソン大統領は彼の「科学的想像力」⁶⁾ (“scientific imagination”) について語っている。その言葉は秀逸である。

パークは人々を高尚にし、靈感を与える。パジョットは人々を楽しませ、気分を浮き立たせ、啓発する。彼は引き裂かれたヴェイルを見、ものごとをありのままに眺めることに耐えられる人々、内容の伴った賢こさと心を刺激する真理を愛する人々の味方である。時には彼の健全さには本物の詩があり、常にそこには穏健さが存在すると言ってよい。それはこれほど多くの強烈な詩的たわごとを産み出してきた時代の批評の中であって、常に貴重で稀有なものである。

19世紀の思想家の中で、パジョットは恐らく最も偉大な一人ではなかったであろうが、彼は最も普遍的な思想家の一人であったことは確かである。著述家・思想家として彼は傑出した天才の贅沢を享受することはなかったが、そのよ

うな天才にしばしば欠けている幅とバランスを所有していた。彼は自己の内部に過去の多くを内包し、従って未来の多くをも秘めていた。様々な広範に及ぶ混乱の時代の中で、彼は冷静な常識と鋭い洞察力でもって新旧両方の測り知れないほど多様な諸問題に古くて深遠なる哲学を適用したのであった。

第13章 原文註

- 1) J. L. Dolme, *The Constitution of England, or an Account of the English Government*, pp.178, 180, 195.
- 2) pp.347, 295.
- 3) "English Constitution," V. 166, 182-3, 212.
- 4) "English Constitution," v. 222, 223, 119-20, 272.
- 5) *Representative Government*, pp.298-312; "English Constitution," v. 264-71.
- 6) See pp.255-6.
- 7) "An Appeal from the New to the Old Whigs, in Consequence of Some Late Discussions in Parliament, Relative to the Reflections on the French Revolution," iii. 416, 415.
- 8) iii. 250; v. 127, 262, 274.
- 9) "Dickens," iii. 101; "Principles of Political Economy," vii. 231; "English Constitution," v. 127.
- 10) Burke, "French Revolution," iii. 165.
- 11) "English Constitution," v. 223.
- 12) F. H. Giddings, quoted by J. P. Lichtenberger, *Development of Social Theory*, pp.277-8.
- 13) viii. 4, 5, 135.
- 14) F. N. House, *The Development of Sociology*, p. 161.
- 15) "On the Constitution of Church and State according to the Idea of Each," *The Complete Works of Samuel Taylor Coleridge*, vi. 38-40; Mill, *Representative Government*, pp.197-200.
- 16) viii. 27, 33, 25, 24.
- 17) viii. 18, 34.
- 18) L. M. Bristol, *Social Adaptation*, p.178.
- 19) "Physics and Politics," viii. 68-9, 102, 120.
- 20) viii. 130.
- 21) Paraphrased by Bagehot, "Physics and Politics," viii. 135.
- 22) viii. 141, 140.
- 23) *Development of Sociology*, pp.160-1.
- 24) Quoted by J. P. Lichtenberger, *Development of Social Theory*, p.283.
- 25) *Development of Social Theory*, p.283.
- 26) "Some Typical Contributions of English Sociologists to Political Theory," *American Journal of Sociology*, xxvii (March 1922), 579.
- 27) "Bagehot as an Economist," *Fortnightly Review*, n.s. xxvii (April 1880), 549-67.

- 28) "The Works of walter Bagehot," *Economic Journal*, xxv (September 1915), 369, 371.
 29) "Bagehot as an Economist," *Fortnightly Review*, n.s. xxvii (April 1880), 566, 558.
 30) viii. 1; "Economic Studies," vii. 211.

第14章 原文 註

- 1) *Pensées* pp.362-3.
 2) "Economic Studies," vii. 101-2; "Shelley," ii. 255-6; "English Constitution," v. 185-6, 182.
 3) "Disraeli," ix. 3-4.
 4) See p.228.
 5) v. 182.
 6) Woodrow Wilson, "A Literary Politician," *Atlantic Monthly* ix xv. (November 1895), 677.

(注) 序文は割愛していたが、末尾に掲げて同書の完訳としたい。

序 文 (付記)

ウォルター・バジョットとその友人達に関する多くの心のこもった有益なる会話と、バジョットの未発表の多くの書簡の閲覧を許可して下さったことに対して、私は故ラッセル・バリントン夫人に感謝の意を表したいと思う。ロンドンの出版社、フェイバー・アンド・フェイバーからは、1933年の出版以前の『ウォルター・バジョットとエリザ・ウィルソンの愛の書簡集』の貴重なコピーを提供して頂いた。ハーバード大学の故アーヴィング・バビット教授からの学恩も測り知れない。ハイダー・E. ロリンズ教授に対しては、厳密さと同様に丹念で徹底的な批評という良き影響を負っている。アーサー・G. ケネディ教授には、文体と文献の両方に関する多くの詳細な示唆を、ノーマン・フォスター教授には、全般にわたる貴重な示唆を頂いたことに感謝を捧げたい。ハーディン・クレイグ、ウィリアム・D. ブリッグス、ジョン・W. ドッズ、フランシス・R. ジョンソンの各教授達にも感謝の意を表したいと思う。